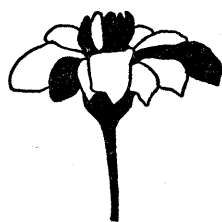


クダケスタン・ジャポニ（イランの日本人幼稚園）②



進藤 君枝

世界のどこかで、大きな飛行機事故が起こるたびに遭難者の中に日本人が含まれているのではないかと、心配される昨今です。それほど世界各地で日本人は活躍するようになりました。そのために父親の仕事の関係で、やむおえず海外で生活する子供の数も年々増加の一途をたっています。

現在、海外には日本人学校が77校あります。そこでは文部省から派遣された日本人教師によって日本の教科書を使用した教育がなされています。中学校・小学校教育に対しては、国からの援助

が考えられるようになってきていますが、これからも海外日本人学校又帰国児童の受け入れに対しては、大きな課題となつてゆくのではないかと思います。

しかし、海外在住の学童の教育問題については考えられるようになっていますが、乳幼児の問題については、全く考えられないのが現状です。そのような中であつて、中近東の中でも早い時期から企業進出がめざましかったテヘランの地では、学齢以前の幼児の教育が問題となり、在留している学齢以前の子供をもつ

母親が中心となり小さな会ができました。当初母親が中心となり子供を預るというでしたが、いろいろな問題が生じ日本から正式の資格を有する教師を招くことになりました。そして一九七三年テヘラン日本人幼稚園が設立されました。私はテヘラン日本人幼稚園の四代目の園長としてテヘラン入りをしたのです。テヘラン日本人幼稚園の運営は、在園する園児の保育料と日本人会からの援助のみで運営されていました。

私は、日本人幼稚園教諭として赴任することが決まっていたのにもかかわらず、ひとつの大きな疑問をもっていました。外国の地までいってどうして日本人同士が集まらなくてはならないのか。せっかく外国で生活する機会があったえられたならば、現地の人々と交わることによって、その中から子供たちは、多くの問題をとらえて成長してゆくのではないかと……。しかしこれは、安易な考え方でした。テヘランにおいては、余りに違う国民性・風俗・習慣・言語の問題又長く滞在しても五、六年、短かくて二年その地に根をおろすことのない人々にとって、又成長期の子供にとっての教育問題は、簡単に解決される問題ではなく、海外で生活している人々が真剣に考えている大きな問題であるということに気づかされました。

一九七六年頃から一九七八年までは、テヘランの町は、活気に満ちあふれていました。町は超高層のビル、ホテルの建築ラッシュ、町のスーパーマーケットには、全世界から輸入された食料・雑貨が山のように積まれていました。交通事情の悪いテヘランの町に、地下鉄・モノレールを作る計画がでていたのもこのころです。当時パーレビ国王はあふれるオイルダラーをつかって、急激に近代国家作りをしようと急いでいたのです。工事関係者、商社、金融機関の日本人駐在員の家族が増えてきました。日本人幼稚園に毎日入園を希望する親子が一日に二、三組来園します。義務教育上入学を希望する児童を待たすことのできない学校の方は、より問題が深刻でした。当時イランの将来は明るい見通しとされており日本人駐在員の増加も考えられておりました。そのため日本人学校の新校舎建築の話が急がれていました。日本人幼稚園も学校が建築されたおりには、その一部を使用して保育を続けると計画がたてられていました。イランがこのようになってしまった現在そのような話は、まるで夢のような出来事だったように思えてなりません。

テヘラン日本人幼稚園は、高級住宅地ナフト通りの一番街にあります。まわりには、塀の高い大きな住宅がたち並んでいます。町は日中でも人通りが少なくシーンと静まりかえっています。こ

の地域の子供はほとんど外にはできません。外にでも必ず親やお手伝いさんが付き添っています。子供同志が寄り集まって遊ぶ姿などみかけることはありません。定員が一杯で入園できない日本から来た子供は母親と一緒に一日中広い家の中にいなくてはなりません。交通事情の悪いテヘランでは母親は余り外出をしませんし、又でかける所もないのです。日本で幼稚園の生活を経験した子供にとっては満たされない毎日だったと思います。

砂場作り

一人でも多くの子供のためにと考え、日本人幼稚園では可能な範囲で年長児から優先的に受け入れました。子供たちが取り組む遊具がありません。はじめに砂場を作ってもらうことになりました。父母の会で父親の協力で砂場作りをして欲しいことを訴えました。休日は退屈しきっている父親たちは大喜びです。保育室が狭いので少しでも園庭を使用できればということで日よけを作ってもらうことになりました。(六月以降十一月までほとんど雨は降りません。日かげさえつくれば戸外も保育室の延長として使用が可能でした。)設計図もひかれ、どこから、太い立派な鉄パイプも運びこまれました。立派な砂場と日よけと鉄棒ができ上がりました。子供たちも父兄も大喜びです。父親たちは、作業

を終ったあとと言いました。「これこそたくさんさんの日本企業が参加してできた大きなプロジェクトだ！I・J・P・Cよりも先に完成したイランにおける大プロジェクトだ……。」と冗談をいいあいながら喜びあいました。砂場ができあがっても、赤土・泥はたくさんあるのですが砂はありません。カスピ海の砂を運んでもらうことになりました。このように皆の協力でき上がった砂場で子供たちは、毎日どろんこになって遊びました。

ヤゴおじさん

イラン人は子供を非常にかわいがります。彫の深い目の鋭いひげのもじやもじやの顔で抱きしめ頬にキスをあびせてくれます。子供たちは、びっくりします。そして泣きたす子供もいます。又愛情の表現として顔をつねったりします。そんなわけでそれが愛情の表現と受けとることのできない子供は、イラン人は嫌やだといげまわることもしばしばありました。又イラン人は子供は何もできないもの全てに手をかけてあげなくてはいけないものと考えています。イラン人幼稚園には、必ず教師の他に一人の若い女の子がいます。子供が何かを要求した時すぐに答えてあげられるためです。六歳の子供がトイレに行くときもついて行きズボンを脱せ、パンツをおろし手伝います。

日本人幼稚園にも一切の雑用をひき受けてくれるヤゴおじさん夫婦がいます。ヤゴおじさんも子供に対してははじめはそうでした。はじめてのお弁当の日です。年長の当番の子供たちが食事の用意をはじめました。椅子・机を用意しそして机をふきます。私達にとっては当然の子供の仕事です。ヤゴおじさんは、あわてました。「ミス・シンドウ！これは私の仕事だ。どうしてこんなことを子供にやらせるのか？」びっくりした様子です。私は、はじめおじさんが憤慨した意味がわからなかったのです。「おじさんこの仕事は子供たちにできることです。子供たちができることは、子供たちにやらせるのです。」おじさんは納得しました。ヤゴおじさん夫婦には、主に幼稚園園舎の管理をしてもらいました。保育の補助としては、駐在員の若い婦人方で子供をもたない子供の好きな方に交代で毎日三、四名ずつ手伝ってもらいました。

ある日のことヤゴおじさんが「ミス・シンドウ 私の孫もこの園に入れて欲しい。同じように月謝もだすから……。」といわれた時はびっくりしました。ヤゴおじさんは自分は、日本人の教育に多少でもかかわっているのだということを大変誇りにしているようでした。私は子供たちの生活に変化をつけるために子供たちと一緒によく園外へでました。そのような時に、彼は普段着の洋服を背広に着がえ革靴をはきさっそうとでかけるのです。子供たち

のために、交通整理をしてくれるのです。よく働くおじさんでしたがおじさんに比べお婆さんは働きません。私がおじさんにくら注意してもなかなかおきません。他のイラン人にそのことをこぼしますと言われるのです。「ミス・シンドウ イラン女性はお働かないもの 家にいるものということがあたりまえなのだから……あれだけ働けばいいではないか。イラン人からみればあなたの方が不思議なのだから……イランの国まで一人できて園を切りもりしていること、びっくりすることなのだよ。」と。

ヤゴおじさんに一つだけこまることがありました。それはラマザン（断食月）の時です。おじさんは日の出から日没まで一切のものを口にいけないのです。そのような生活が一ヶ月近く続くのです。暑い四〇度以上の日中、水も飲まず食べ物も口に入れません。力がなくなってしまう木かげに座りこんでしまします。しかしラマザンがあけますといつもの元気なおじさんに戻り働き続けてくれました。

いくつかの行事

毎日の生活が単調なため、家庭では日本人同志が集まりパーティーがよくもたれます。幼稚園でも子供たちが主催しお客様を招くいくつかの会が計画され、子供たちは、自分達が主催するパー

ティーを喜んで計画しました。

。ひなまつり……………五段飾りのおひなさまを子供の家から

借りてきてひなまつりをしました。みんなで飾りつけです。空
カンを持ち寄って自分達のおひなさまも作りました。そして近
所のインターナショナル幼稚園のお友達を招き日本から届いた
ひなあられをわけて楽しみました。

。七夕まつり……………笹は手に入りません。園庭のリンゴの
木に飾りつけをし、願い事も書きました。イラン人手品師を招
き夜は家族と一緒にユカタを着て夕涼み会をしました。

。やきいもパーティー……………イランでは一応日本で食べる野菜
はほとんど手に入ります。しかしサツマイモとゴボウは手に入
りません。落ち葉で焼いたジャガイモにたつぷりバターをぬっ
ておいしいパーティー。

。豚汁パーティー……………「おなべに水を八分：おだしの豚
を入れて……」豚肉はイラン人は食べません。おだしは牛肉で
す。持ち寄った材料を園庭で調理し自分たちでテーブルセット
をしてのパーティー。

子供たちにとって「自分達で開くパーティー」大変楽しみなで
きごとだったようです。

不穏な動き

子供たちとの生活も試行錯誤の連続で一年が終わりました。イラ
ンの土地にもなれ一年の土台の上に新しい経験を積み重ねようと
している時、イランに不穏な動きが感じられるようになりました。
下町でチャドルをつけていない女性が刃物でさされたり、何
かが起こりはじめたようです。今までは王様の悪口は、一言もい
えなかったのですがモスク（イスラム教寺院）で僧侶が金曜日の
集団礼拝の場で公然と王様批判をしたということです。当時日増
しに王制打倒の動きがでていたのですが、パーレビ王はなんとか
力でその運動を抑えこもうとしていました。下町の方のみでみら
れたデモが山の手の方におしかけて来るようになりました。宗教
的行事の日は政府が反対しても突然商店は休みになります。その
ような時には日本人幼稚園・学校も休みになります。暑い夏が終
り長い冬が来るまでの短かい一時子供たちと思いきり園外で活動
したかったのですが、そのころ「外国人がねらわれている」外へ
でない方がよいとの噂が入りました。半信半疑でした。私たちの
日常生活にはなんの変化もないのです。幼稚園の行事にも気を配
り、各方面の方からいろいろな情報を得ました。だれも確実なこ
とはわかりません。しかし今のイランの状態から何も起こらない

かもしれない。でも何かが起っても決して不思議ではないといわれていました。突然幼稚園が休みになったり、母親たちが荷作りをはじめたり子供たちも何かを感じはじめました。

一九七八年九月このように反王制の力がうずをまきはじめたころ当時の福田総理がイランを訪ずれ日本政府としてパーレビ体制により強力な援助をすることを約束しました。その夜のことで、イラン全土に戒厳令がひかれました。多くの会社から駐在員家族の引きあげ命令がでました。毎日のようにお別れ会をしました。着任してから一週間位の子供もいます。「先生！何もなかったらすぐにイランに戻ってきますから……」身辺の荷物をもって半信半疑のまま帰国した母子がほとんどでした。七〇名近く在園していた子供が三週間のあいだに二十名になってしまいました。

戒厳令がひかれ軍政に入ったにもかかわらず王制打倒の声は大きくなるばかりです。王制打倒の呼びかけで大規模なストライキもはじまりイラン全土が停電になる日もありました。十二月はじめのアシュラの日（イスラム暦最大な宗教的儀式がおこなわれる日）に何か大きなできごとが起こるであろうという噂がひろがりました。

三〇〇名近くいた日本人学校も五〇名になってしまいました。

幼稚園は十二名です。幼稚園の役員の方々もそれぞれ会社の命令で帰国しました。P・T・A会長も家族は日本に戻しロンドンへ一時的に脱出することになりました。停電が続く中女性一人の生活は大変であらうとの配慮で私も二学期終了を少し早めて日本へ一時帰国することになりました。

夜半、外出禁止令をやぶり家の近所からも「アッラー アキバル アッラー アキバル」（神は偉大である 神は偉大である）との叫び声がきこえはじめました。

幼稚園も宿舎もそのままにして二週間の帰国とおもって日本に戻っている間にパーレビ王がイランの地を去りホメニ師がテヘラン入りをしたのです。

イランの政情が落ちつくまで私は日本に滞在するはめになりました。

そして翌年の六月、ホメニ時代のテヘランに戻り今度は小さな小さなテヘラン日本人幼稚園を再開しました。

（続く）

